

## 学士力の質保証に関する研究（2） —学生主体型授業に関する考察—

川 野 司

九州女子短期大学養護教育科、北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1（〒807-8586）

（2010年9月30日受付、2010年11月9日受理）

### 要 旨

本稿は、専攻科生が修了研究として大学評価・学位授与機構へ提出する論文の書き方に関する学生主体型授業を考察するものである。前年度に修了研究についてアンケート調査を行った。そこで判明したことは、論文構成と論文内容の在り方、論文の具体的な書き方、役立つ知識・経験談を取り入れた分かりやすい指導などであった。こうした結果をもとに、2010年前期の授業科目「総合特別演習」では、新たな授業内容を組み立てて、学生の学びを主体にした授業づくりに取り組んだ。授業では、論文構成の手順と論文作成の具体的方法・技術面での指導を行った。同時に学生が取り組んでいる論文テーマや調査研究の方法および進捗状況など、具体的事例を授業のなかに積極的に取り入れた。その結果、学生自らがお互いの考えを率直に出し合い、論文作成の基礎的知識とスキルを修得することができた。これは学士力の質保証で求められている授業改善を促す一つの事例研究の提供である。

### 1 研究課題

大学教育が大衆化からユニバーサル段階に入り、社会経済がグローバル化していくなか、大学の学位そのものの価値が国境を超えた競争にさらされる状況になった<sup>(1)</sup>。OECDにおいても、加盟国の高等教育に関する調査研究が進められ、我が国は2006年に文部科学省を中心にした報告書を作成しOECDに提出している。その後、OECD調査団によって大学教育の実態について、現地調査やインタビューなどが行われ、その調査結果の報告書が2009年に「日本の大学改革」として公表されている<sup>(2)</sup>。

一方、学士力の質保証に関する研究は、国レベルで始まったばかりである。2008年12月に中央教育審議会より「学士課程教育の構築に向けて」の答申がなされたが、その後「中長期的な大学教育の在り方に関する」諮問が矢つぎばやに出され、中央教育審議会大学分科会では審議が進められている。2009年6月に第一次報告が出され、2010年6月29日には第4次報告がなされた<sup>(3)</sup>。この第4次報告の「第2 公的な質保証システムの整備と、その一環としての教育情報の公開の促進等」では、「教育力の向上の観点から公表が求められる情報として、どのようなカリキュラムに基づいて、学生にどのような知識・能力を身に付けるこ

とができるのか」が問われている。

大学教育は、①入試に関わる入口の問題、②大学在学に関わる教育・研究の問題、③卒業に関わる出口の問題の3つに分けて考えることができる。本研究は②のカリキュラムに関わる事例研究である。学生主体型授業を通して学生の学びを育てるとともに、学生の論文作成力の基礎を培うための取り組みであり、文脈上は学士力の質保証に関する研究である。今後大学では、学士力の質保証に関して、学生の学ぶ意欲を育てる具体的な教育内容・方法、評価の在り方など、義務化を含めた対応が求められることは必至である。

本研究は、学士力の質保証に関する研究(1)に続き、その(2)として、「学士課程教育の構築に向けて」答申にみられる教育課程編成・実施を通して、学生に修得が期待される知識・能力に関するものなかで、論文作成の基礎的知識とスキルの修得を意図した学生主体型授業について事例研究として考察するものである。

2010年前期専攻科2年生の授業科目「総合特別演習」では、学生の実態をもとに「学士取得のための論文の書き方」の授業テーマを掲げ、15回分のカリキュラム編成を行った。その理由は、専攻科2年生が10月上旬に大学評価・学位授与機構へ提出する論文について、その書き方に関するアウトラインと情報提供を行うとともに、学生自身の学びをサポートし、主体的に論文作成を進めていける態度と意欲を育てたいと考えたからである。これは、学士力の質保証という総括的・広範囲な内容を授業実践レベルで考察するものである。教員には担当科目の授業で、教育の質保証の視点から自らの授業内容とカリキュラムを見直し、改善を図っていく姿勢が求められる。そこで本授業では、論文作成計画や論文構成などについて、教員と学生が共に取り組める学生主体型授業を進めていった。学生主体型授業を通じて、学生にどのような知識・スキルなどを修得させることができたかを考える。

## II 事例研究の意義と経緯

### 1 学士論文に関する調査用紙の作成

2009年度専攻科2年生が、修了研究の論文執筆で苦勞している様子を目の当たりにした。そこで専攻科1・2年生に対して、下の内容で修了研究の論文について自由記述の調査を行った。次に自由記述内容を整理し、修了研究の論文に関するアンケート調査用紙を作成した。そして2009年度後期の第14回授業のなかで、専攻科1・2年生にアンケート調査を行った。本事例では、学生の論文作成に関わる知識・理解を中心にした教育の質保証を視野に置いて授業を進めていった。

#### 指導に関わる自由記述アンケート

- 1 修了研究では、どのような具体的な指導を望みますか。思い付くままに自由に書いて下さい。

- 2 修了研究で一番苦労したことは、どのようなことですか。またそれをどのように解決していききましたか。
- 3 授業について、教員に対して期待することは、どのようなことですか。
- 4 本科の授業と専攻科の授業で違うことは何ですか。
- 5 教員採用試験に対して、あなたの対策について教えてください。
- 6 教員採用試験に対して、教員に期待することはどのようなことですか
- 7 大学の教員について、どのよう資質・能力を望みますか。

ご協力、ありがとうございます

この自由記述をもとに、次のアンケート用紙を作成した。

修了研究等に関するアンケート（該当番号を3つ選んで□に書いてください）

1 修了研究では、どのような指導を望みますか。

- ① 実験の手順、操作方法
- ② 研究推進の全体像
- ③ 論文構成の仕方
- ④ 論文提出までのスケジュール
- ⑤ 指導の時間の確保
- ⑥ 論文作成の計画
- ⑦ 論文作成前に読むべき書籍や資料
- ⑧ 参考文献の検索法
- ⑨ 論文提出後の小論文指導
- ⑩ コミュニケーションの日常化
- ⑪ 研究姿勢や態度および専門的知識の伝授
- ⑫ 論文読み合わせと修正の日常化
- ⑬ パソコン上でのデータ処理と表示方法の操作
- ⑭ 誤字脱字など文章表現作法や文章力
- ⑮ 論文作成上での壁を乗り越える的確な助言
- ⑯ 論理的に文章を書く技術

--	--	--

2 修了研究で一番苦労したことは、どのようなことですか。

- ① 論文の書き方、特に考察の仕方
- ② 実験がうまく進まなかった
- ③ アンケート調査の検定法とデータの表示方法
- ④ アンケート作成の仕方と発送のやり方
- ⑤ 文章作成の仕方
- ⑥ データをグラフ化するやり方

--	--	--

- ⑦ 論文内容の構成の仕方
- ⑧ 論文テーマの決め方
- ⑨ 調査方法

3 授業について、教員に対して期待することは、どのようなことですか。

- ① 実践的な講義
- ② 授業ポイントの明確化
- ③ みんなが理解できる分かりやすい指導
- ④ 楽しい役立つ内容
- ⑤ 一方的に話したり、しゃべったりしないこと
- ⑥ 仕事上で役立つ知識、教員の経験談
- ⑦ 採用試験の対策
- ⑧ 学生の理解の様子をよく把握できること

--	--	--

4 大学の教員について、どのよう資質・能力を望みますか。

- ① 知識や技術がしっかりしている
- ② 信頼関係が築けるような対応
- ③ 成績や点数だけで判断しない
- ④ 教員同士の連携の緊密化
- ⑤ 学生への早めの連絡
- ⑥ 学生への親身な対応と信頼感
- ⑦ 学生への的確なアドバイス
- ⑧ 現場の具体的な話

--	--	--

## 2 修了研究等に関するアンケートのまとめ

専攻科1・2年生27名のアンケート結果をまとめたものが下の内容である。アンケート内容は、修了研究に関するものが2問、授業と教員に関するものが2問であった。4問のアンケート結果は、いずれも教育の質保証に関する学生の要望であり、教員は学生の要望や願いを踏まえた授業を推進していくことが必要である。

### (ア) 修了研究の指導について

問1で「修了研究では、どのような指導を望みますか」を尋ねたところ、図1のような結果が得られた。学生が修了研究で望む指導の割合が高い上位3項目は、「論文の構成の仕方」(40.7%)、「論文提出までのスケジュール」(37.0%)、「論理的に文章を書く技術」(25.9%)となっていた。

学生は、論文の書き方自体をこれまで学ぶ機会がなかっただけに、大学評価・学位授与機

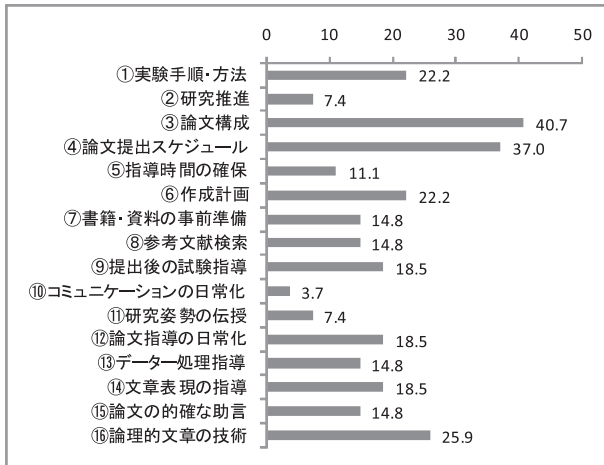


図1 修了研究に望む指導内容

構へ提出しなければならない論文作成にかなりの不安を抱いていた。これは、後で授業に対する感想を尋ねた際、ほとんどの学生がこうした論文の書き方に関わる体系的な授業開設を肯定的に受け止めていた事実と合致する。そういう意味では、やはりカリキュラムのなかで、授業科目としての「論文の書き方」を開講したがよいと思われる。これは初年次教育の具体的内容の一つと言える。

### (イ) 修了研究の苦勞について

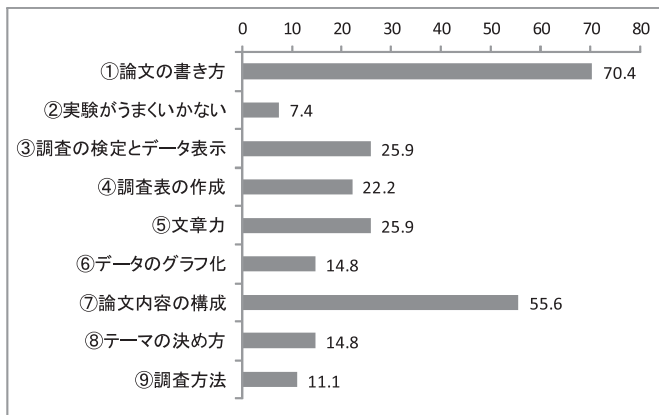


図2 修了研究で苦勞した内容

問2で「修了研究で一番苦勞したことは、どのようなことですか」を尋ねたところ、図2の結果が得られた。学生が修了研究で一番苦勞した割合が高い上位3項目は、「論文の書き方や考察の仕方」(70.4%)、「論文内容の構成の仕方」(55.6%)、「アンケート調査の検定法とデータの表示方法」(25.9%)、「文章作成の仕方」(25.9%)となっていた。

問2は、主として2010年3月に卒業した専攻科生13名に尋ねた内容であるが、やはり論文の書き方と内容構成などについて、一番苦勞をしたと認識している学生が多かった。

また実際に、論文作成で苦勞したことを学生にインタビューして尋ねたところ、「論文をどのように書いていったらよいのか分からない」、「先輩の論文を見よう見まねで書いた」、「序論、本論、結論など、具体的な書き方が分からなかった」という回答が多かった。さらに学生はお互いに論文作成や大学評価・学位授与機構への提出方法などについて情報交換をしていた。例えば電子データによる提出では、締め切りぎりぎりに行くことはデータ送信が

混み合っていて受理されない懸念があるので、郵送による提出の方がよいという連絡を取り合っていた。しかし研究室によっては、締め切り間際に論文の読み合わせが行われたので、電子郵送にならざるを得なかったことなど、提出に関する情報をお互いに提供し合っていた。論文提出については、学生まかせだけにするのではなく、教員側からの計画的・積極的な指導が必要であり、最終チェックと提出書類に遺漏がないようにすることが重要である。

(ウ) 授業への期待について

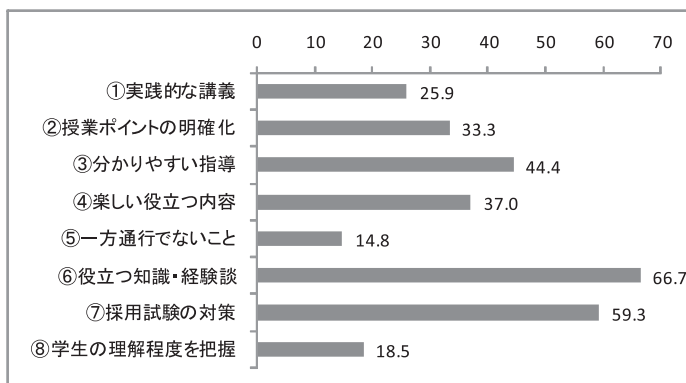


図3 学生が望む授業

図3は「授業について、教員に対して期待することは、どのようなことですか」を尋ねてみた結果である。この設問は、論文の書き方には関係ないように思えるが、学生が授業について何を期待しているかを問うものであった。回答では、学生が教員に期待しているものは、割合が高い順から、

「仕事で役立つ知識、教員の経験談」(66.7%)、「採用試験の対策」(59.3%)、「みんなが理解できる分かりやすい授業」(44.4%)であった。学生は教員からの一方通行でない、役立つ分かる授業を望んでいることが分かる。このことは、大学授業だけに限られるものではなく、義務教育諸学校においても、教員に一番求められている内容と言える。大学においても、学生に分かりやすい、また将来の進路に関係した授業を進めていくことが必要である。教員にはもっと、学生の意見や考えを取り入れた授業実践を行っていくことが求められる。

(エ) 教員の資質・能力

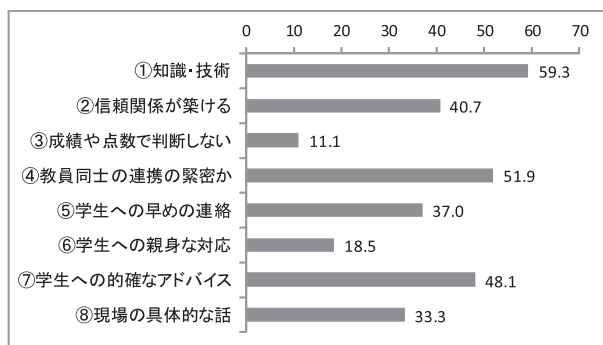


図4 学生が望む教員の資質・能力

問4で「大学の教員について、どのような資質・能力を望みますか」を尋ねたところ、割合が高い順から、「知識・技術がしっかりしている」(59.3%)、「教員同士の連携の緊密化」(51.9%)、「学生への的確なアドバイス」(48.1%)となっていた。教員

がしっかりした知識・技能を持っていることは、大学に限らず、どの校種の教員にとっても教育指導の前提になることである。ただ最高学府としての大学では、より専門的な知識・技能が要求されることは当然である。次に教員には、教員同士の連携を学生が望んでいることは、裏を返せば、教員の連携が十分に出来ていないことを指摘していると言える。大学では、研究以外では教員がお互いに協力して物事を遂行する発想が見られないが、少なくとも学科では、教員相互の連携をもっと緊密に行うことが必要である。日常的に教員が学生の要望や願いなどを受け入れる組織づくりと、学科長など役職にある教員の教育面での組織マネジメントとリーダーシップの発揮が大切である。

### 3 2010年度「総合特別演習」シラバス作成

2010年1月に、教務課より2010年度担当科目のシラバス作成が要請された。そこで「総合特別演習」では、学生の実態と教育の質保証の観点から、これまでと違う形態の授業を考えた。学生主体型授業を行うため、学生に身近でしかも論文作成に直結する授業テーマである「論文の書き方に関する授業」を進めることにした。「授業計画」では、学生の修士研究に関する調査結果をもとに、表1の15回分の「論文の書き方」についての授業テーマを作成した。

表1 「論文の書き方」のシラバス

科目名		担当者職・氏名				
教職特別演習		教授	川野 司			
学科		学年	履修方法	授業形態	開講時期	単位数
専攻科		2	自由	演習	前期	2
教科書	酒井聡樹「これからレポート・卒論を書く若者のために」共立出版					
参考書	別途指示する。					
授業概要						
<p>学生の皆さん方にとっては、レポートや修論は自らが取り組まなければならない大切なことです。これらは自ら考え、自ら判断して課題を解決していく最も身近な事例といえるものです。しかしながら、それらに関する方法論がよく分からない場合も多いようです。特に修論を書くことは長期におよぶ事柄です。実際に修論に関わるデータや調査をしたり、修論を書いたりする前に知っておいた方が得策なことがたくさんあります。この授業では、学生の皆さんと一緒にレポートや修論に関わる具体的な方法論などについて学習していきます。授業では、授業テーマに関するレポートや修論について自信をもって取り組めることを目的とします。</p>						

授 業 計 画				
週	テ ー マ		授 業 内 容	備 考
1	オリエンテーション		・授業の進め方と授業の概論 ・評価およびレポート提出について	
2	1部1章、2章、3章		・レポートや修論についての概略	
3	2部1章、2章、3章		・テーマの決め方、 ・文献検索、実験、調査の進め方	
4	2部4章、5章		・構想の練り方 ・タイトルの付け方	
5	2部6章		・序論の書き方	
6	2部7章		・研究方法の説明の仕方	
7	2部8章、9章		・結果の説明の仕方 ・図表の提示の仕方	
8	2部10章		・説得力のある主張とは	
9	2部11章		・考察の進め方	
10	2部12章		・引用の仕方	
11	2部13章、14章		・結論の書き方 ・要旨の書き方	
12	2部15章		・効率のよい執筆作業	
13	3部1章、2章		・分かりやすい文章とは ・文章全体として分かりやすくする技術	
14	3部3章		・一つひとつの文を分かりやすくする技術	
15	まとめ		・試験と授業のまとめ	
評価 方法	通常試験	する	定期テスト(60%)と提出物(予習レポート:40%)によって総合的に評価する。	
	再試験	しない		

### III 学生主体型授業の実践

#### 1 第1回授業テーマ「オリエンテーション」

論文の作成に関しては、4月からの授業のなかで取り組んでいけば、学生の論文に対する認識が深まるものと考えた。まず、論文提出までの各自の計画を立てさせることにした。そのために、教員より表2の具体的スケジュールを提示して論文提出までの期間を明示し、逆算してあと6ヶ月しかないことを説明した。特に論文原稿は、8月末までに仕上げ、9月の1ヶ月は論文推敲に費やすことを話した。また、多くの専攻科生が、実証的研究を行うことが予想されたので、アンケートやインタビュー調査は、7月には終了しておくこと、さらにその調査用紙作成は、6月には完成しておく必要があることを伝えた。このように具体的な取り組みを話していくことで、論文作成に費やせる月日が少ないことを実感したようである。しかもこの半年は、6月には専攻科生の教育実習が2週間あり、7月には養護教諭採用試験が実施されるので、その準備も必要となり、論文作成作業は限られた期間で効率よく進めていくことが求められる。さらに8月上旬は、各都道府県の教員採用試験の1次合格者の発表



があり、その1～2週間後には、2次試験の集団討論、実技、個人面接などがひかえていたので、合格者には2次試験の対策と準備のために、論文作成の時間がとれないのが実情であった。

表2 学生に配布した論文作成に関わるレジュメ

学士論文の作成計画について		
<p>まずは何と言っても、論文の研究テーマを考えることである。大学の研究紀要などでは、論文が一応出来上がった段階で、査読後に論文テーマを変更する場合もある。論文の本論と論文テーマに食い違いが判明したときには、テーマ変更をした方が実情に即してよいだろう。指導教員と研究に関する大まかな方向性が確認できたら、その方向で研究を進めていけばよいが、論文完成までの日程を考えることが必要である。これは論文提出の日から逆算して月割り内容を記載していくことである。下のような論文作成計画をつくると、自分がその時に何をしなければならないかが具体的に明瞭になっていくものである。</p> <p>【論文作成スケジュール】</p>		
月	論文進捗状況	主な行事
3	・論文の先行研究	
4	・研究計画、論文構想 ・先行研究調べと資料収集	・入学式 ・オリエンテーション
5	・研究計画と論文構成最終決定 ・調査内容の決定	
6	・調査と実施と回収 ・データの分析と論文構成	・教育実習
7	・論文構成と草稿作成	・採用試験（1次）
8	・論文原稿作成	・採用試験（2次）
9	・論文推敲 ・中旬 指導教員へ論文提出 ・下旬 論文の添削・修正	・教育実習 ・保育士試験
	・上旬 審査機構へ提出	
10	・締切 10月6日	
11	・論文の筆記試験準備 ・論文の要約説明準備	
	・論文の筆記試験	・ピアヘルパー試験
12	・論文発表の準備	
1	・論文発表の準備	

【論文の一般形式】

序 論	本 論	結 論
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 主題の紹介</li><li>・ 問いの提示</li><li>・ 先行研究の紹介</li><li>・ 方法の提示</li></ul>	序論で提示した問いを解決するために議論する。そのため章や節のまとめりで、論理的に問題解決を図る。	・ 本論の議論を踏まえての結論を提示する。

学生は初めて学術的論文を15枚程度（1枚1200字）仕上げていかなければならないので、多くの学生が心配・不安を抱いていた。こうした不安を和らげるために、授業のなかで、論文やアンケートに関する進捗状況の報告を取り入れた。また専攻科生一人ひとりの個別の具体的研究テーマを授業で取り上げることで、相互の切磋琢磨が行われ、アンケート用紙の作成では、お互いの信頼感と協力意識が高まったように感じた。各自の研究テーマに関しては、次の資料を作成して授業テーマとの関連で取り上げた。

## 2 第3回授業テーマ「テーマの決め方」

授業では授業テーマに関わる下の(ア)～(エ)の資料を作成した。そして学生による「テーマの決め方」に関する発表と協議の後に、教員から授業テーマに添っての補足説明を行った。

### (ア) テーマについて

テーマは論文の全体を示しています。研究の領域や範囲を書いていると言えます。ですから序論では、これから論述する内容を限定して明確にする必要があります。「何を問題にしているのか」、「その問題への回答（主張）は何か」、「資料や方法について」の概要を述べる箇所と考えていいでしょう。

序論は本論のあらすじであり概要なのです。論文の骨格は「問題・方法・主張」の3点です。序論もこの3点で書いていくといいでしょう。本論ができてから、その概要を述べる方が書きやすいと思いますが、人によっては、序論を書いて、その骨格に肉付けをしていく方法で論文を仕上げている人もいます。どちらの手法で書くかは、その人の論文を書くスタイルによります。他にもいろいろな方法があると思いますが、要は自分が書きやすいやり方で書いていけばいいのです。私は本論がある程度できた後の方が、序論や概要は書きやすいように思いますから、そうしたやり方をしています。

一方、先行研究を調べる場合には、テーマに関わるキーワードでネット検索をすることがあるでしょう。また学会案内では、発表内容が領域や分野ごとにまとめて記載してあります。その方が見る側からすれば、自分が関心を持っている部会に参加しやすいのです。仮に参加ができない場合でも、現在、自分が関心を抱いている領域の研究動向を読み取ることができます。そのことでいろいろな研究情報を知ったり、刺激を受けて頑張ってみようとの気持ち

になることもあります。

皆さんのなかには、日本学校保健学会、日本養護教諭教育学会などの学会発表をしたいと考えている人もいるでしょう。学会発表をすることは貴重な経験ですから、研究室の先生に相談して共同発表者として発表して欲しいと思います。そうでなくても学会発表を先生から勧められることもあるでしょう。大学に所属している絶好の機会ですから、是非とも発表することを勧めます。学会発表に際しては、プレゼンテーション、発表原稿の作成など発表に関わる一連の儀式が身に付きます。「案ずるよりも産むが易し」です。発表すると、意外にも「こんなものか」と感じて自信が持てるようになります。

#### (イ) テーマでの「問題」提起

学会で口頭発表をする場合、テーマとそれに関わる要約を求められます。内容は発表者に任せられますが、研究大会当時の大会誌に発表要項を載せる必要がありますから、2ヶ月程前の早い段階に発表レジюмеが要求されます。発表当日は予定したテーマでの口頭発表が行われます。これは問題提起と考えていいでしょう。

つまり、自分は「このような問題意識を持っており、その問題についてこのように取り組んでおり、このように考えております。あるいは、このように取り組んだら、このような結果になりました。関係の皆さんは、どのように思われるでしょうか。私の研究に対するアドバイスをお願いします」との考えでの発表と思います。

ですから、テーマには問題が含まれていることも大切ですし、序論では「問題」を立て、その解決に至った道筋を簡明に提示することです。つまり、このような手はずで後の論述を展開していくことを述べるのです。そういう意味では、テーマは疑問形で書くことも一案ではないでしょうか。「養護教諭による保健室運営について」のテーマでもいいですが、このテーマを疑問形に書き換えたら、どのようになるでしょうか。

少し考えてみましょう。このテーマで論文を書こうと考えている人は、養護教諭の職務の専門性や特殊性と、子どもが特別の思いを抱いている保健室の望ましい在り方を視野に思いを持っていると思います。養護教諭の職務に見合った保健室をどのように運営していけばいいのか、あるいは子どもが安心して自分の気持ちが話せて伝えられる保健室づくりを考えている思いがうかがわれるようです。ですから、その思いや考えが論文を読む人に伝わる書き方や表現の工夫が必要でしょう。例えば、「子どもが安心して訪問できる保健室は、どのような運営管理を進めたらよいのか」、「子どもが安心して訪問できる保健室の在り方は、どのようなものか」、「養護教諭の職務を生かす期待される保健室の在り方」、「子どもが望む養護教諭と保健室はどのような特質があるのだろうか」、「期待される養護教諭と保健室運営はどのような関係があるだろうか」など、多くの文言のテーマ文が考えられるでしょう。

#### (ウ) テーマの問題へのアプローチ

テーマの問題に対して、どのような方法や手法を用いて解決の糸口を掴もうとしたのかを

簡潔に分かりやすく示す必要があります。特に実証論文では、他の人がその手法を追試してやれるように手の内を示すことです。実験や観察あるいは調査などを行って問題の核心へのアプローチは本論で詳細に論述するとよいでしょう。序論では問題解決の方法を手短に提示するようにしましょう。

#### (エ) テーマに関するコメント

さて先週、みなさんに書いてもらった研究テーマを一緒に考えてみましょう。テーマは次のものです。①「教師の不適切な行動、発言について」、②「養護教諭の行う保健学習と評価の関わり」－山口県と北九州市の比較－、③「外科的な救急処置の事例検討から考える養護の視点」、④「女子大学生における人間関係づくり」、⑤「育てる保健室を求めて」－事例と法規から考える－、⑥「薬物乱用防止教育の現状と課題」－米国との比較－、⑦「養護教諭が行う新型インフルエンザ対策」－兵庫県と福岡県の学校の実態調査から－、⑧「学校における医療的ケアの充実について」－教師、養護教諭、看護師の目線から－、⑨「保健室に入室した児童・生徒に行うタッチングの効果について」などです。

これらのテーマをみて、皆さんはその内容がある程度把握できると思います。それは、皆さんがこの領域・分野での専門性を修得しているからです。皆さんのテーマについての有益な意見やコメントは、授業で発表して協議を深めて欲しいと思います。テーマについては、皆さん一人ひとりの様々な思いがあると思います。まだ十分に練り上げていないと述べている人もいます。論文を仕上げしていく途上で、テーマに関わるもっとよい言葉が見つかることもあるでしょうし、本論の記述内容と照らし合わせたとき、テーマや序鈴を修正した方がよい場合も出てくるかも知れません。その時には、迷わないで、自分が「こちらの方がいいな」と感じたら、何度でも変更は可能なのです。「焦らず・慌てず・迷わず」の3つの「ず」の思いで修正してください。

以下、教科書50頁の良いタイトルのつけ方「分かりやすい、取り組んだ問題（着眼点）、印象を強くする工夫」の3点で、みなさんのテーマについて、簡単に率直なコメントを記してみます。

#### ①「教師の不適切な行動、発言について」

分かりやすいタイトルで、取り組もうとしている問題も分かります。一方、教師の不適切な行動や発言をどうしようとしているのか、何を調べて見ようとするのかが分かりません。「～発言について」で打ち切れているように思えます。例えば「教師の不適切な行動、発言が生徒に与える影響（について）」として、着眼点を副題に書いてはどうでしょうか。

#### ②「養護教諭の行う保健学習と評価の関わり」－山口県と北九州市の比較－

分かりやすいタイトルです。養護教諭が保健学習をするときに、評価の観点を入れて指導をすることがうかがえます。保健学習の実践について山口県と北九州市の現場の事例を踏まえた比較検討をすることが分かります。

③「外科的な救急処置の事例検討から考える養護の視点」

分かりやすいタイトルです。事例からどういう事を想定しているのか、考えているのか、それを着眼点に書くこともいいでしょう。養護教諭の視点とは何を意図しているのか。それらを副題に記すこともいいのではないのでしょうか。

④「女子大学生における人間関係づくり」

テーマが広すぎるようです。何をねらっているのかが多少ぼやけているように思えます。着眼点が分かるように副題で書いた方がいいのではないのでしょうか。女子大学生の人間関係は大切ですが、人間関係を少し絞って研究を進める必要があります。女子大といった場合、4年生を考えますので、短大生での調査を計画しているのなら、短大生と書いた方がいいでしょう。

⑤「育てる保健室を求めて」－事例と法規から考える－

主題と副題との関係は特に「法規から」となっていますので、そのつながり具合をもっと字数を増やして書いた方がいいでしょう。「育てる」も漠然としています。何を育てるのか、著者がイメージしているものがあれば、そのことを明確に述べた方が分かりやすいのではないのでしょうか。

⑥「薬物乱用防止教育の現状と課題」－米国との比較－

主題も副題もともに分かりやすいですが、副題に「日本」を入れて「米国と日本との比較」とした方がいいです。あるいは「日米と（の）比較」などとしてはどうでしょうか。

⑦「養護教諭が行う新型インフルエンザ対策」－兵庫県と福岡県の学校の実態調査から－

主題と副題とも分かりやすいです。一瞬、「行う」の言葉に目が行きました。例えば、「公立小学校（の）養護教諭がおこなう（取り組む・進める）新型インフルエンザ対策としてはどうでしょうか。」

⑧「学校における医療的ケアの充実について」－教師、養護教諭、看護師の目線から－

主題と副題ともに分かりやすい言葉です。著者は養護教諭には医療的ケアが必要との思いを抱いていると思います。副題の「教師」は必要なのでしょうか。校種は小中学校の両校を考えているのでしょうか。

⑨「保健室に来室した児童・生徒に行うタッチングの効果について」

児童・生徒となっているので、小中学校のタッチング効果を述べるのでしょうか。もし副題が書けるのなら、着眼点を記してはどうでしょうか。

まだ決めかねている人もいますが、ここに示したテーマ例は、ある程度その研究内容が理解できて内容も分かると思います。一語一語を吟味し、よりよいテーマになるように、さらに考えていきましょう。

#### IV 学生主体型授業の検証

授業では、学生が直面している修論の書き方について、発表と協議を中心にした学生主体型の授業展開を取り入れた。発表ではパワーポイントを使用してプレゼンテーションをするようにした。同時に発表テーマに関する予習レポートの提出を求めた。そして実際の授業実践が効果的であったかを検証するため、自由記述による質的データと授業アンケートの結果で考えてみた。授業アンケート集計と自由記載の内容からは、学生主体型授業が学生の学ぶ意欲と論文作成の基礎的知識とスキルの修得に効果的であったことが分かった。

##### 1 授業に対するアンケート結果から

平成22年7月16日の授業アンケートでは、参画意欲が持てたかどうかを尋ねると、「あてはまる」(50%)「ややあてはまる」(10%)を合わせると、60%の学生が参画意欲を持って授業に臨んでいたと言える(図5)。

同じく、学生が、自ら授業に参画している実感がもてたかどうかを尋ねると、図6から分かるように、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせて、90%の学生が授業参画の実感が持てたと判断していた。

また、学生に学ぶ意欲が育っているかどうかを見るために、「日常的に学習ができる環境づくりにつとめたか」、「予習を行ったか」、「自分で考える力や習慣が身に付いたか」について尋ねた。その結果が図7(日常的な学習習慣の形成)、図8(予習をする習慣の形成)、図9(考える力や習慣の形成)である。図中の「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせたものを「肯定的判断」と考えると、70%~90%の割合で肯定的判断をしていたことが分かる。

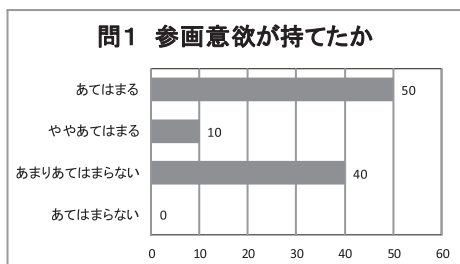


図5 学生の授業への参画意欲

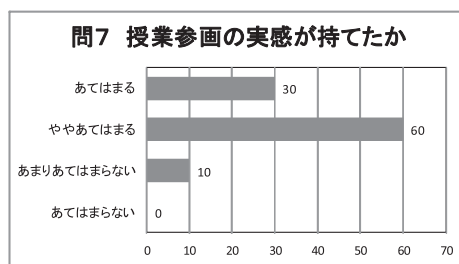


図6 学生の授業参画の実感

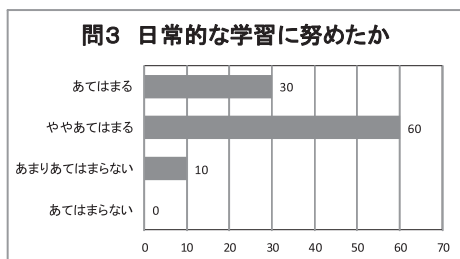


図7 日常的な学習習慣の形成

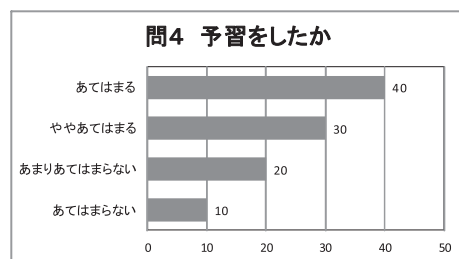


図8 予習をする習慣の形成

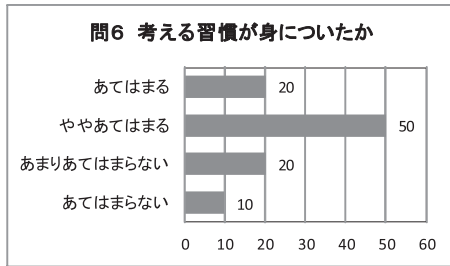


図9 考える力や習慣の形成

## 2 授業に対する自由記述から

「この授業では、学士取得のための論文の書き方について学んできました。現在、あなたは論文作成について取り組んでいると思います。この授業で役立つと思ったことは、どのような内容でしたか」を学生に尋ねた。20名全員の記述内容の要点は次のものである。

- ① 「この授業で役立つと思ったことは、すべてです。論文を書くにあたっての大切なポイントや順序や参考文献のまとめ方まで、たくさんのが学べました。」
- ② 「この授業で学んだ内容を振り返ってみても、十分論文作成に対応できる内容であったと思う。また各学生の研究内容の進め方や進行状況も話題にあがったり、様々な議論も行うことが出来て、論文だけでなく、他の様々な場面で使える技術の様なものを得た」
- ③ 「私は、文章を書くこと、自分の意見を文章にまとめること、レポートを書くことが苦手なので、全体的に助かりました」
- ④ 「私の研究内容は、まだ一般的に知られていない感染症に関する事なので、分かりやすい図表を使用し、分かりやすい言葉で説明し、読者が感染症対策について、今まで以上に目を向け、取り組んでいただけるような論文にしたいと考えています」
- ⑤ 「授業を受けるなかで、今まで論文というのは何かとても難しいことを書かないといけないという思いが強かったのですが、そうではないことが分かりました。難しいことを書かなくてはいけないのではなく、自分が疑問に思ったことを調べて書けばいいのだと分かり、それなら自分でもできると思うようになりました。」
- ⑥ 「序論を書く際に、どのような背景を入れたら良いのか分からなかったけど、教科書を読み進めていくと、イメージできない所があったり、理解しづらい表現があったりしたけど、先生が毎授業、レジュメを作ってくれて、分かりやすくしてくれたので、理解しやすかったです。また、他の人の進行状況を知れて刺激になったし、他の人の良いところを参考にすることが出来たので、とても有意義な授業になりました。」
- ⑦ 「授業中に、先生の論文を書く上で失敗したことや、良かった点などを聞くことができ、注意することや、次にどのような壁がやってくるのかを知ることができ、先を見通して取り組むことが出来ました。また、みんなの進行状況や方法などを発表することで、参

考になることも多くありました。この授業を通じて、論文の書き方を学ぶことが出来たと同時に、他の研究の経過を聞くことで、自分自身、新たな発見や考えさせられる課題も多くあげられたので、とても有意義な授業でした」

- ⑧ 「私は、論文がどのようなものなのか、どういうふうを書くのかということがまったく分かりませんでした。この授業で学んだことすべてが、私のなかでは役に立っています。この授業の初めのときは、私はまったく論文に手をつけていない状態だったので、論文を書き始める前に授業で、論文の作り方・書き方ということを学べたので、だいたいの構成をあまり悩まずに作る事ができたと感じています。また教科書だけではなく、毎回、先生が作ってくださる補足説明のプリントが大変役立ちました。私にとってこの授業は、本当に毎回役立つこと、新たな論文についての情報を得るための大切な授業でした。自分でパワーポイントを作ったのも初めてだし、私は普段あまり自分から授業中に発表をするということがないので、最初の頃は、不安なこともありましたが、本当に勉強になった授業でした。この授業のおかげで、採用試験の面接でもあまり緊張せずに、自分の意見をはっきりと答えることができたと感じています」
- ⑨ 「私がこの授業で学んだ論文作成のコツは、とにかく分かりやすく書くことである。そのためには、テーマは分かりやすく興味をひくもの、内容は簡潔に無駄な情報は書かない、必要な情報は削らない、結果は短く分析は考察で、図表はパット見て分かるものをなど、たくさん注意点があつた。授業を通して新たに理解したこともあつたし、改めて考えていくこともあつた。
- ⑩ 「私がこの授業で特に役立つと思ったことは、先ずテーマは後からつけても良いということである。2つ目は、本に書いてあることを疑うということである。本はインターネットとは違い、しっかりとした根拠があるものや実証されたもののみが記載されていると思っていた。しかし、それを疑う目を持ち、自ら確かめることも大切だということを知った。
- ⑪ 「この授業では、論文やレポートの書き方について学びました。レポートもまともに書いたことがなく、他の授業でも好きなように書いていました。しかし、書き手は読み手のことを考え、書かなければいけないということを学びました。先生のプリントをみんなで読むのは良かったです。プリントはもらったままにしていまいがちなので、特に論文の書き方は教科書より参考になります。
- ⑫ 「論文の構成は、論文の骨組みなので、構成がしっかりしていないと、その後に論文を書くことが大切だと学んだ。論文の書き方については、自分の考えだけを並べるのではなく、事実、データ等の根拠を明らかにし、それに基づいて論文を書くことが大切だと学んだ。
- ⑬ 「授業で論文の書き方について1から詳しくまなぶことができたので、とてもよかったと思っている。なかでも私が1番役に立ったと思ったことが、参考文献の引用と分かりや



すい文章を書くにはどの様にしたらよいかだ。先生が作成してくれたプリントも論文を書く上での禁忌などが分かりやすくまとめられ、毎回の授業だけでなく補足として学ぶことが出来たのでとても良かったと実感している」

- ⑭ 「今回の学士取得のための論文は、私にとって初めての学術的論文です。具体的に参考になったのは、必ず根拠となるデータが必要だということです。自分の意見を述べるだけでは駄目で、事実と意見を必ず区別することが大切です。」
- ⑮ 「この授業は、論文作成について本当に役立った。第一に、自分の研究とにている先行研究を真似てみるということである。先行研究を読み進めるなかで、著者はこういう観点で結果を出しているが、私は違う観点からとらえようなど、様々な研究の観点を見付けることが出来た。第二に、分かりやすい論文を書くには、読者のことを第一に考えるということである。」
- ⑯ 「一番役に立ったのは、基本的な構成について詳しく学ぶことができたことです。論文は今まで書いてきた作文などとは書く量も内容もまったく違うもので、初めて書くものだったので、実際、何も分からない状態でした。この授業で論文の書き方を学んでいくにつれて、自分の書きたいテーマや調査内容を定めることが出来ました。」
- ⑰ 「まず論文は、ただ書くのではなく自分の考えや研究をまとめて発表するということに意義があることに気付いた。先人達と同じ内容でもよいこと、それに自分なりの発展的なものや考えを付け加えれば良いということ、これらはこれからの社会人として生きていくためにとても重要なことであること、また先人達の論文をできるだけ引用していくことも礼儀になることに驚いた」
- ⑱ 「この授業では、文の使い方、序論などのまとめ方などが詳しく分かり、頭の整理が出来た。各授業で割り当てられた箇所をみんなが分かりやすくまとめてくれたり、先生が毎回プリントをくれたりしたので、とても参考になった。また、みんなの発表後には、各自の卒論テーマや内容も聞くことができた。自分自身だけで進めるのではなく、みんなの考えや意見を聞くことで、修論でこう書きたいという案も浮かんだし、やる気も出た」
- ⑲ 「この授業で役立つと思った内容は全部だったと思います。私たちはまだ論文なんて書いたことはなかったし、論文の構成なんて全く知りませんでした。でもこの授業を受けたことで、少しずつ論文を作成していく手順が分かり、論文を書くことに対する意欲もわいてきました」
- ⑳ 「この授業で役に立ったことはいっぱいあります。私は文章を書くのが不得意で、小論文でさえも書いたことがなかったので、論文の書き方も分からないし、とても不安でいっぱいでした。しかし、この授業で論文を書くにあたっての構成や、各段落の意味や内容、言葉の並べ方などを学びました。」

## V 考察と課題

本研究は、教育の質保証の視点から学生主体型授業の事例を通して、学生の学ぶ意欲を育成するなかで、学生がどのような知識・技能を修得できたかを考察するものであった。結論的に言えば、学生はこの授業に主体的に取り組み、プレゼンテーションによる発表が出来るようになり、論文構成の仕方、テーマ設定、序論、本論、結論と結果、および引用の仕方などの基本が身に付いたと言える。さらに研究に対する意欲や姿勢の高まりもうかがえた。授業の中では担当者が協力して発表および協議を進行していくことができた。以上のことは、授業中に学生との関わりで実感したり、アンケート内容の結果に基づくものであるが、授業に対する客観的評価と検証が十分でないことは今後の課題と言える。

学生主体型授業を通して実感したことが2つある。1つは、論文作成は学生自身に降りかかる問題なので、説得力と実行力が加速していったことである。2つは、適切なアドバイスをすることで、学生は期待以上の成果と結果を出せる力を備えていることを強く感じた。学生は10月上旬には、大学評価・学位授与機構に自らの論文提出が迫っているので、論文作成に真剣にならざるを得ない状況ではあった。そうした状況を踏まえて、学生の立場に立ちながら具体的な指導を続けていった。大学の役割としては、卒業後の学生の進路先に関わる知識・技能を十分に修得させることが必要である。特に将来の義務教育諸学校の教員を目指している学生には、学校現場に関わる内容を授業のなかで十分に指導し、学生の教職に対する意識高揚を図るとともに、学校現場で生きて働く実践的指導力の育成を行わなければならない。難しい知識や理論は必要ではなく、実際に学校現場では教師としてどのようなことを身に付け、どのように振る舞わなければならないかを知っていることの方が重要である。如何に高慢な理論を知っていようと、それらの知識を実際の学習指導や生徒指導の場面で役立てられないようでは意味はないのである。大学の授業では知識と理論を教授することは大切だが、それよりも知識と理論は変わっていくので、新しい知識を自ら創造していける能力の育成やその方法論を修得させることの方が大切である。

このことは2011年度教員採用試験の1次合格者が本年は特段に多かったことで実証された。こうした事実を目の前にすると、教員の指導如何によって、学生の資質・能力を引き出すことができ、そのことが学生の自己実現につながっていくことが理解される。授業においては上述のアンケート結果から分かるように、学生は役立つ知識、分かりやすい授業、教壇からの一方的な講義ではなく学生主体型授業を望んでいる。学生は卒業後の進路と就職先に関わる知識・技能の修得を希望しており、そうした内容を授業のなかに取り入れて欲しいと願っている。特に教職課程を履修し、義務教育諸学校に勤務したいと熱望する学生には、実践的指導力と学校課題や教育問題に的確に対応できるスキルの育成が望まれる。これは、教員採用試験の面接や集団討論、模擬授業などの指導を通して実感することである。そういう意味では、知識・理解、汎用的スキル、態度・志向性、総合的な学習経験と創造的思考力な

どの学士力の具体的内容の修得が可能となる教育課程を学科単位で協力して構築していくことが喫緊の課題である。

#### 注

- (1) 齊藤里美監訳『国境を超える高等教育』明石書店 2008年 11月
- (2) OECD 森利枝訳『日本の大学改革』明石書店 2009年 10月
- (3) 中央教育審議会大学部会「中長期的な大学教育の在り方に関する第四次報告」文部科学省 2010年6月

## Research on quality assurance of degree power (2)

Tsukasa KAWANO

Department of School-Nursing ,Kyushu Women's Junior College  
1-1Jiyugaoka Yahatanishi-ku, Kitakyushu-Shi Fukuoka 807-8586 Japan

### Abstract

This paper is intended to discuss the advanced course students about writing articles to submit to a National Institution for Academic Degrees and University Evaluation. Research survey conducted last year of completion. Then it turned out, the structure and existence of the papers presented at the paper, writing paper concrete was easy to understand and incorporate their experiences teaching useful knowledge. Based on these results, subjects in 2010 “special training” comprehensive, the course content to build a new classroom building was mainly working on student learning. In class with advice on technical procedures and specific methods of configuring thesis paper. Progress and research methods and thesis topics and students are working on at the same time actively incorporate lessons Some concrete examples. As a result, openly brainstormed ideas together students themselves, have acquired basic knowledge and skills of essay writing. This is one case study provides lessons that encourage improved quality assurance required by the degree of force

Keyword: Undergraduate Education／Student-centered learning／Quality Assurance／  
Improve the Quality education／Learning Outcome／College Degree